

# ハイデガーとカント哲学

浅野 章

日本大学大学院総合社会情報研究科

## Heidegger and Kant's Philosophy

ASANO Akira

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

All European philosophies lead to Kant, and proceed from him. The position of Kant in modern history of thoughts is important. Heidegger, educated by neo-Kantianism in Germany, finished his dissertation at Freiburg. In his masterpiece, *Being and Time*, Heidegger tells us to have a mind destructive of his great predecessors' thoughts. *Kant and the problem of Metaphysics* is said to be one of such works.

This paper is intended to reconsider the relationship between Heidegger's philosophy and Kant's.

---

### 1.はじめに

ヨーロッパの全哲学はカントに注ぎ、またカントから発している。カントは哲学史上の要所に位置する。ハイデガーはドイツ新カント派の教育を受け、学位論文をフライブルク大学において仕上げている。大作『存在と時間』において偉大な先行哲学者たちの思想の解体を目論んでいた。ハイデガーの『カントと形而上学の問題』はこの作業の一環である。本稿はハイデガーとカントとのかかわりについて再考しようとするものである。

### 2.ハイデガーと新カント学派<sup>1</sup>

高等学校を卒業すると、ハイデガー<sup>2</sup>は聖職者の道に進むべく修練士の養成所に登録するが、健康上の理由で登録を抹消される。その後直ちに、ハイデガーは地元の大学であるフライブルク大学神学部<sup>3</sup>に在籍する。一連の動きは、ハイデガーの希望もあつたであろうが、学費の援助に当たっていたカトリック教会の意向を無視することはできないであろう。神学部から哲学部への転部により、ハイデガーの学問的環境は当時なお勢威を持っていた新カント派の強い影響を受けることとなる。

すなわち、具体的には、リッケルトの指導によるゼミナールの出席であり、使用テキストはラスクの

ものによる。

リッケルトは新カント学派の一方の巨頭、ヴィンデルバントとともに、いわゆる独逸西南学派あるいはその地に因んで、バーデン学派とも称されている新カント学派を代表する一人である。

「心理主義における判断論」をテーマとして、卒業論文（学位論文）を提出<sup>3</sup>。内容は、新カント学派と対立する心理主義を判断論において批判したもので、心理的なものからは論理的なものの本質は導出されえないとし、論理的なもの<sup>4</sup>の究極を妥当あるいは妥当する意味に求めている<sup>4</sup>。

なお、哲学部在学中に、いくつかの小論文を寄稿しているが、1913年に刊行された『カント書簡集（オーマン編）』についての批評がカントについての初期作品に属するものと見られる<sup>5</sup>。

教授資格論文もまた新カント学派の影響のもとに論考され、リッケルトに提出されている。この当時、というのは教授資格論文作成当時を言うのであるが、直接フッサールの指導を受けていない、ハイデガーの独学による現象学<sup>6</sup>の理解である時期を指すが、新カント学派の影響とともに、フッサール現象学から独自に学び取った方法が生かされている<sup>6</sup>。資格論文に立ち入ることはしないが、指摘されている注目すべき点に触れておく。

「もろもろの事実はその純粋な自体を直接的に呈示し、提示する。われわれの認識は提示されたこの事態を注視し、汲みつくすことである」<sup>7</sup>。事実と認識に関する関わりかたは、哲学において決定的ともいべき重要性をもつ。

事実が、事実それ自体を純粋に呈示するという見方、またそれをそのまま注視し、汲み尽くしていくという学的作業、ここにあるのは、きわめて素朴に見えるが看過すべきではない。ここに、現象学的方法を容易に察することができる一方、対象についての見方、捉え方に、ハイデガーの一貫する独自性を認めることができよう。

この点に注目してみると、新カント学派のうちにあって、すでにその中に甘んじ得ないハイデガーの性格をうかがうことも可能のように思われる。つまり、あえて、この資格論文の「結びの章」を待たずとも、論文に立ち向かう論者の学的姿勢のうちにそれを読み取ることができるといえそうであるが、もとより、この推測は、資格論文のまさに紙背に徹する読みがあつてのことである<sup>8</sup>。なお、教授資格試験の最後に課されている *venia legendi*(講義許可)取得のための試験講義『歴史学における時間概念』は、リッケルトの審査を受けている。

ところで、これら修学期における業績のうちにカント哲学の影響を読み取ることが可能であろうか。

確かに新カント学派の雰囲気のもとに養成され訓練された成果であつてみれば、何らかの影響を指摘することは想像される。というより、まさにそれらの中のテーマ自体に、関連する重要概念を見出す。

「判断論」といい「心理主義」といい、「範疇論」にしても、さらに「時間概念」に至っては、カント哲学の中心を形成しているといつて過言ではない。もっともそのままこれを肯定してのことではなく批判の観点から捉えている場合も含めてのことである。『ドゥンス・スコトゥスの範疇論と意義論』と題するこの論文は<sup>9</sup>、標題に即して、範疇論と意義論の二部からなっている。第一部の範疇論は第二部意義論の予備作業であり、当然スコラ哲学の範疇、*Ens*(存在)、*Unum*(一)、*Verum*(真)、*Bonum*(善)についての論考である。範疇論が対象領域の構造の解明である以上超越的であり、その根本にあるのは「存在」であ

る。範疇の中でも根本にある *Ens*(存在)は、それ故、範疇の範疇であり、最高窮極概念である。範疇論は「存在」から展開されねばならないが、対象性一般であり、それ故展開の手がかりがない。しかしその根底には「異定立」(*Heterothesis*)、すなわち、「一と他」の指定がある。これがあって始めて対象が指定される。あるいは対象が指定されるということは、そのもの(一)は他ではないということである。したがって範疇論は *Unum*(一)という超越概念の問題となる。ここで注目されるのは、「異定立」の思想はリッケルトの思想であるということである<sup>10</sup>。さらにこの資格論文の第二部についてはフッサールの思想の影響の指摘がなされている<sup>11</sup>。ハイデガーの思想の歩みを見る上で、修学時代の特色を捉えるに当たって貴重な示唆を与えている。しかし当面は、ハイデガーとカント哲学との直接のかかわりが問われているのでその面から一言しておくにとどめたい。

要点は唯一つ。カントにおける範疇論とのかかわりについてである。カントは『純粋理性批判』において独自の範疇論を展開した。スコラ哲学の範疇論について、推論の原理として得るところはないが、永いあいだ維持されてきた思想は空虚に見えても起源は探求するに値するとして、その根底には量の範疇、すなわち単一性、数多性、全体性、の三範疇があると指摘して、「実在するものは、一と、真と、善とである」(*quodlibet est unum, verum, bonum.*)との命題についてカントなりの見方をし説明している<sup>12</sup>。

このカントの姿勢にハイデガーのドゥンス・スコトゥス研究を重ねることは、その試み自体無謀と誇られよう。したがって修学期を通してハイデガーがカントから直接影響を受けたと見ることには積極的に評価はできないものと思う。しかし中世哲学の研究が、後年いかに深く修学期時代の涵養の中から生まれ影響していったか、この点については、範疇の範疇、最高窮極の概念「存在」、さらに、存在の哲学者の名を恣にしているハイデガーと合わせ見るとき、敢えて言及するまでもない。

ハイデガーがカント哲学と正面から対決したのは、主著『存在と時間』(1947)の研究を通して、『純粋理性批判』の読解に向かったときである。本課題は必然的にこの検討に向かう<sup>13</sup>。

### 3. 『純粋理性批判』と『存在と時間』

カント哲学の首位を占めるのは、『純粋理性批判』に先ず指を屈するのに異論を挟むものはあるまい。他方、ハイデガーの主著といえば誰もが第一に『存在と時間』を挙げるであろう。両者の思想の特色をこの二大哲学書のうちに見て取ることは、いささか趣の違ひを感じさせはするもののある種の関心呼び起こさないでもない。

もとより、カントにとってハイデガーは知る由もないが、ハイデガーからすれば、カントはきわめて重要な先達ということになる。先達のうちの巨匠といっても過言ではない大きな存在である。ハイデガーがカントから何を吸収し、これを自らの哲学として消化したが、あるいはカントとの対決によって何を克服したか、つまりカントをいかに乗り越えたか、関心のもたれるところである。

今、単純に、世紀を代表するこの二大哲学書を眼前に据え置いて、その特色を想い見ると、実に鮮やかにそれらの有する時代背景が彷彿としてくる。実に単純なことにすぎないが、いまさらのように偉大なる書物の持つ歴史における存在感を感じないわけにいかない。十八世紀は理性の時代であるといわれている。その世紀を締めくくるように、1781年、カント多年の労作、『純粋理性批判』が世に出た<sup>14</sup>。

カントの述懐するところによると、純粋理性の働き、つまりその権能を検討するのに非常な苦心を払い、そのために長年の歳月を要したのである。その甲斐あってカント自ら満足する考察に成功した。この述懐はカントの自信を物語るとともに自足を知る、いわば幸福なる人としてのカントの人となりやそれとなく伝えているものであり、'Es ist gut!' 今のは際の一語、として世に知られているカントらしい一面に通ずるものでもある。

純粋理性批判の大業を、カントに思いつかせたのは、ヒュームである。まさに「独断のまどろみ」(dogmatischer Schlummer)を覚まされて、カントが自らの課題としたのは、「先天的総合判断はいかにして可能であるか」という問いであった。

ヒュームの投げかけた説は、端的に言うと、因果説の否定である。原因と結果の結合に必然性は本来

ないのであり、ただ記憶と習慣によって、作られたものに過ぎない、というのである。

因果の必然性の否定は、形而上学の根底を揺るがし、さらに自然科学の学としての資格を剥奪し、もつとも確実とされた数学さえも危地に陥れる。

懐疑主義者ヒュームと評されている、まさに徹底した懐疑であるが、そもそもヒュームの抱いた疑いの端緒は単純なことである。すなわち、「・・・である」がいつしか「・・・すべし」に文脈が変わるのを、疑問に思ったことに発している。

つまり、単なる事実の集積から、何ゆえ当為(必然)が生じてくるか、という疑問である。

この疑問をヒュームは、人間の記憶と習慣によって、本来関係のないものの中にある種の結びつきが生じて、それがいつか、いかにも必然的な関係にあるかのように記憶してしまう、と考えた。

カントはヒュームから突きつけられた問題を、カントなりの方によって、その解決に向かった。

その方法は周知のとおり、分析的判断と総合的判断による認識の仕方の区別である。つまり、問題は結合にある。AとBとの結合に単純化される。「AはBである」、と何故いえるのか。この命題の性格が問われる。そこにおいて明らかにされるのが、分析的判断と総合的判断の判断における性格である。

カントによると問題となるのは総合的判断であるといわれる。事実、分析的判断には、Aつまり主語とB、すなわち述語との間に問題は生じない。「AはBである」という判断は、主語Aに含まれている述語Bを単に取り出したに過ぎない、つまり分析した結果である。もしこの結果が誤りであるとするならば、矛盾率に反することになり、この命題そのものが否定される。また分析的判断からは何ら新しい知識を得ることができないことも理解されるであろう。

これに対して総合的判断は、「AはBである」において、本来関係のない主語Aと述語Bとの結合であり、まさにヒュームの提起した問題である。純粋理性の本質にかかわる。

『純粋理性批判』の性格を示す端的な表現は、著書の巻頭に置かれているベーコンの『大機関』からの引用文である。

無際限なる迷妄に終局を与え正しき限界を画するものであるからである。<sup>15</sup>

また、『純粹理性批判』の緒言の書き出しに、人間の理性の本性上いかんともしがたい性格に触れて、これを眺めているカントの心中を察するとき、言いようのない感慨を催してくる。カントの言を持ってすれば、素質としての形而上学（*metaphysica naturalis*）<sup>16</sup>、人間であるかぎりその本性として表れてくる形而上学的欲求、このものを前にしての感慨である。

#### 4.形而上学と『純粹理性批判』

形而上学をカントは一般形而上学とも学校形而上学とも呼んでいる。形而上学と『純粹理性批判』との関係を、カントは「錬金術と化学」あるいは「占星術と天文学」にたとえている<sup>17</sup>。学としての純粹理性批判の性格を明らかにすること、それは形而上学の学としての資格を問うものであり、この資格をもたない形而上学を追放することによって年来の無益な形而上学的論争に終止符を打とうとする。

カントが純粹理性として取り出した、人間の認識能力。形而上学は純粹理性の働きによっている。形而上学にかかわる問題は純粹理性の能力あるいはその資格の検討にゆだねられる。ここに形而上学の主張が顧みられ、その能力が査問される。あえて、哲学ではなく法学の概念を持ってこの審議に応じようとしたカントの意図は、事実問題（*quid facti*）と権利問題（*quid juris*）の別を明らかにすることによって<sup>18</sup>、形而上学の学としての資格を問おうとした。

純粹理性に問われているのは、権利問題であるが、事実問題の裏づけを要する。事実の裏づけのない権利の要求は根拠のないむなしいものに過ぎない。演繹（*Deduktiv*）の手法を哲学によらず法学から借用しての論考は批判の武器として格好のものである。

先験的弁証論において、純粹理性の主張の二律背反はそのまま認められる。つまり、これらに関する論議において学としての試金石に耐えることができず、その資格を失う。その試金石とは、経験である。しかしもともと問題は経験を越えた、超越的性格を有するものではなかったか。それを経験のレベルに

おいて問題にしようというのは、もともと問題解決を無視していたといえないか。

ここで、カント哲学が先験的あるいは超越論的といわれる哲学の性格についての理解が求められる。つまり「学としての形而上学は可能であるか」。人間の認識は経験のみではなく、先天的能力によって営まれている。後者を無視しているとしてカントはヒュームを批判する。問題は先天的綜合判断の可能にある。数学と自然科学（物理学）において、その可能であることを証明したが、証明というより、厳然たる事実を訴えたともみることできる。つまり学として、数学は成立しており、ニュートンによる力学もまた学として認められている。しかし、形而上学については、まさに哲学における戦場であり決することのない論争である。実りなき学の体裁を持った形而上学は史上誇りえた地位を追われいまや卑賤に身をやつしにいたった。カントは形而上学の歴史を顧みるとともに、これが学としての資格、能力を根底から暴きたて、その命運を決しようとしさえする。しかし、形而上学は人間の素質として備わっている。この点を見極めて研究を進めるところに『純粹理性批判』の意義がある。それが先験的哲学である。

先験的哲学とは、純粹理性の批判が、そのために全計画を建築術的に、というのは原理に基づいて、設計し、この建築物を形成するあらゆる部分の完全と安全とを十分に保障すべき一つの学の構想である。<sup>19</sup>

この学の構想に当たって、注意しなければならないのは、経験的なものを含む概念を交えてはならない、つまりカントの強調する純粹であること、先天的認識がまったく純粹であることである。何ゆえこの点を強調するかというと、先天的認識であっても、道徳に関する原則あるいは根本概念は、先験的哲学には属しないとされるからにほかならない<sup>20</sup>。それゆえ、「先験的哲学は、もっぱら思弁的な純粹理性による世界知である」<sup>21</sup>。この指摘は重要である。先験的哲学の内容を告げるとともに、純粹理性の性格がまったく思弁的であることを示してい

る。したがって、実践的であることは、先験的哲学に属しないこととなる。「すべて実践的なものは衝動の発動 (Bewegungsgründe, Treibfedern) を含むかぎり、感情に関与するものであり、感情とは経験的認識源泉に属するものである」<sup>22</sup>からである。

## 5. 『カント形而上学の問題』

ハイデガーとカント哲学とのかかわりとして、最も注目されるのは、ハイデガーの著書『カントと形而上学の問題』 *Kant and the Problem of Metaphysics*, (*Kant und das Problem der Metaphysik*(1929))である。

この書の目的は、「序論」冒頭に記されている。

以下の研究は、形而上学の問題を基礎的存在論の問題として眺めるために、カントの純粹理性批判を形而上学の一つの定礎として解釈するという課題を負わされている。<sup>23</sup>

また本文第一章に入るに先立って、「純粹理性批判を形而上学の定礎とみる解釈によって基礎的存在論の理念を説明すること」と改めて本文全体の趣旨が掲げられている<sup>24</sup>。したがって、『カントと形而上学の問題』の理解は、この趣旨の解明にあるといっても過言ではないであろう。しかし、ことは簡単ではない。ハイデガー自身そのことを意識して取り掛かっていることは、「定礎とみる解釈によって」という断りのうちに読み取ることができる。しかし、この解釈、すなわち、『純粹理性批判』を「形而上学の定礎」と見ることについて、それが直ちにカントの意向に従うものと言い得るか、少なくとも『純粹理性批判』を紐解くものにとって容易に気づく疑問である。事実、この書 (『カントと形而上学の問題』) の紹介に当たって、ハイデガーによる特異な見方という評価もなされており、何より、ハイデガーが後年、この書が版を重ねるに際して、それらの序文において、言及して止まなかったという事実を思い見るだけで十分この間の事情を察することができる<sup>25</sup>。

確かに、『純粹理性批判』は将来の形而上学の学としての建設が確固とした基盤の上になされることを、カントは望んでいた。『プロレゴメナ』の表題が端的にそのことを示している。このことの意味すると

ころは深い。今はそのことに触れず、『カントと形而上学の問題』について一瞥することとする。

その前に『純粹理性批判』の主要関心は、理論理性にあること、断るまでもないのであるが、念のため記しておく (先に思弁的純粹理性として指摘)。

『カントと形而上学の問題』が、ハイデガー哲学において注目されるのは、『存在と時間』とのかかわりがその一因をなしているから見なされるからである。

未完に終わった『存在と時間』の第二部の第一章にはカントについての論考が計画されていた。この計画の実施が、ほかならない『カントと形而上学の問題』であるとされる。そうであるとすれば、『存在と時間』において意図されていた哲学史の解体といかに照合するかが問われる。まさに解体と定礎では雲泥の差がある。さし当たってこの点に深入りすることは控えて、『カントと形而上学の問題』においてハイデガーが明示した「課題」に迫ることとしたい。

『カントと形而上学の問題』の課題は、「純粹理性批判を形而上学の定礎とみる解釈により、基礎的存在論の理念を説明すること」にあった。先に記したように、ハイデガーの『純粹理性批判』の取り上げ方には問題はあるが、当面はハイデガーの説くところにしたがって考えていくこととする。

『カントと形而上学の問題』は、序論以下四章からなっている。

### 序論

第一章 端緒における形而上学の定礎

第二章 遂行における形而上学の定礎

第三章 その根源における形而上学の定礎

第四章 反復における形而上学の定礎

序論は簡潔な趣向全体の解説で、ハイデガーによる『純粹理性批判』の見方、何よりもハイデガー独自の用語を知る上に欠かすことができない。「基礎的存在論というのは、「人間の本性に属する」形而上学にたいし基礎を用意すべき、有限者たる人間の存在論的分析論のことである」。さらに、形而上学との関係について、「基礎的存在論とは形而上学を可能なら

しめるために必然的に要求される人間の<sup>ダーザイン</sup>生存の形而上学である」<sup>26</sup>。ここで想起されるのは、『存在と時間』における規定である。形而上学とはいわず、

ダーザインの実存論的分析論といわれている。それがダーザイン(生存、現存在)の形而上学である。

第一章は三節よりなるが、第一節の「形而上学の伝承的概念」において、形而上学の歴史が素描されている。断るまでもなく、ハイデガーによって解されている形而上学の歴史である。ハイデガーは生涯においてしばしば形而上学について語るが、その基本をなしている。したがって単なる meta と physika の合成語による解説に尽きるものではない。meta ta physika は<sup>27</sup>、アリストテレスの prōte philosophia (本来の哲学、第一哲学)の後ろに、アリストテレス著作の編集の際に置かれた、「ある原理的な哲学的当惑をあらわす標題」(下線筆者)でもある。アリストテレスの第一哲学は、後世の学校哲学(論理学、物理学、倫理学)の中にはそれをはめ込む枠がなかったからである。この説明<sup>28</sup>、形而上学成立の始原についての説明、一つを取り上げてハイデガー独自の形而上学観とも言うべき印象を与える。

『純粋理性批判』が形而上学の定礎として、問われなければならないのは、特に取り立てて取り上げるまでもない、いわば『純粋理性批判』自体の持つ性格を示すものではあるが、この書の研究の出発に際して改めて確認しておくことは研究遂行を裏切るものにする上から必須であろう。

伝承的形而上学の線を堅く守って「本来の形而上学」「究極目的における形而上学」すなわち特殊形而上学の研究に取り掛かろうとしているカントの目に映った形而上学とは、

この学においては、一切の企画がつねに「挫折」し、見解の一致と明快な功績とが存しないことにかんがみて、この学の内的可能性への問いが明らかにされるまでは純粋理性認識を拡張しようと言う一切の試みは阻止されなければならない。<sup>29</sup>

形而上学の定礎の課題はこのようにして課された。この課題の解決へ向けての遂行が第二章である。ハイデガーは遂行を五段階によって説く。

第二章「定礎としての形而上学の遂行」、において主題として論考されているのは、各段階のテーマに

よって明示されている。

定礎の第一段階：純粋認識の本質要素

定礎の第二段階：純粋認識の本質統一

定礎の第三段階：存在論的総合の本質統一の内的可能性

定礎の第四段階：存在論的認識の内的可能性の基礎

定礎の第五段階；存在論認識の完全な本質規定

しかし、第二章は単にこの段階を追って論考を重ねるには多くの重要な指摘を見落とすことになりかねない。ということは、第二章自体複雑な構造を持っているからにほかならない。

第二章は大きく A と B との二部に分かれており、五段階は B の「存在論的内的可能性の投企が遂行される諸段階」に属している。見落とすことのできない重要な指摘というのは、A の「形而上学の定礎の遂行にかんする遡行次元の特徴づけ」の中の I の「認識一般の本質」(このテーマは、本書全体を 45 節に区分して構成している、その第 4 節目に当たるのであるが)、そこにおいて、「根源領野の性格づけは人間的認識の有限性を明らかにすることに集中されねばならない」という指摘である<sup>30</sup>。この指摘、すなわち根源領野の性格づけとは、人間認識の根源領野の場所と種類に関するものであり、ハイデガーは、従来の純粋理性批判の解釈は、根源次元の先行的かつ十分な性格づけが不当にもなおざりにされるか誤り解された、と糾弾する<sup>31</sup>。『純粋理性批判』についてのハイデガーの論考の姿勢は、ここに極められているとって過言ではないであろう。遡行といい、有限性の強調といい、研究方法と論拠が明示されている。この点について、重ねて指摘しているが、それはある種の印象深さをもって次のように記されている。

カントが純粋理性批判の主題的討究のつぎの最初の命題でもって述べていることは、すでにこの点にかんして多くのばあいあまりにも低く評価されているのである。「どんな仕方で、またどんな媒介を通じて認識が対象と関係するにせよ、認識がそれを通じて対象と関係するところのもの、そして一切の思惟が媒介としてそれが目指すところのものは直感である」(A19,B33)<sup>32</sup>。

引用文に続いての、ハイデガーの一言こそ本書『カントと形而上学の問題』の核心をつく言葉である。

認識とはもともと直感であるということを、ひとは純粋理性批判のあらゆる理解にかんじてい  
わば頭にたたき込まねばならない<sup>33</sup>。

なお、認識における直感の位置づけについては、カント哲学の急所に触れるが、周知の「直感なき概念は空虚である」として、「概念なき直感は盲目である」に対応するものとされているが、ハイデガーの見解は、直感優先であり、直感に比重が置かれている。この点についての、カント自身の見解にしても、認識の虚妄性についてこれを厳しく指弾するカントであり、ハイデガーに劣るものではない。このことは、純粋理性の性格そのものに関わる問題であり、折に触れてカントの強調するところでもある<sup>34</sup>。

しかし、ハイデガーのカント解釈において、際立っているのはやはり直感の重視であり、これが、構想力をめぐってのいわば本書のハイライトを成す第三章へと展開していく。

先に記した、第二章の五段階は構想力を導き出す準備とも取れる。もとより、単なる準備というのではなく、『純粋理性批判』の内容に逐一関わっていくのがこの第二章である。まさに標題の通り「遂行」としての論考である。したがって、『純粋理性批判』の要所の指摘も改めてなされている。

「純粋悟性概念の図式論について」という標題のもとに(A137,B176-187)先験的演繹論に続くこの十一ページが、浩瀚な著作全体の真髄をなすに違いないとハイデガーは指摘する<sup>35</sup>。

この指摘は第四段階の「存在論的認識の内的可能性の基礎」においてなされている。それは、カントの図式論の内容的解釈である。ハイデガーは逐一これに従事しており、これを七つの項目に要約する<sup>36</sup>。

それは図式論の導入に始まり(1)、図式構造を分析する予備作業を経て(2)、先験的図式一般の分析を行い(3)、さらに一般から個々の先験的図式の分析を、カテゴリー表を手引きとして解釈し(4)、カテゴリーの四分類を対応する時間に関して特徴付け(5)、先験

的図式性を超越の「真の唯一の制約」として規定することによって(6)、図式性によって基礎付けられたカテゴリーの本質規定の適用がなされる(7)、とするものである。

難解を持って聞こえる『純粋理性批判』であり、特に其の中での核心をなす箇所を要約という作業によってどれほど読者の理解に訴えることができるか、おそらく訴えようと試みるのは無謀であろう<sup>37</sup>。

ただし、ここにおいて簡明に指摘できることは、ハイデガーのカント哲学に対する見方である。

この図式論においてハイデガーは、「図式性の章は「混乱」していないばかりか、無比の透明さをもって構築されている。図式性の章は「ひとを迷わす」ものでないばかりか、未聞の確実さをもって純粋理性批判の全問題体系の核心に導く」<sup>38</sup>と、カントの叙述を称揚するとともにその重大な意義を強調している。

そこで、ハイデガーの解釈によらず、直接原文に当たってみる。

ハイデガーの自著において、「存在論における内的可能性の基礎」と記している当該の箇所は<sup>39</sup>、『純粋理性批判』では、「先験的原理論」の第二部「先験的論理学」の中の「先験的分析論」において、「判断力の先験的理説」(別名「原則の分析論」)の標題の下に、第一章「純粋理性の図式性について」と題して、カントによって論述されている箇所に当たる(A137 - 147, B176 - 187)。

カントの論述全体から受ける印象は、ハイデガーに比してむしろ平明である。しかしそれは表面的な印象に過ぎないのであり、まさに接するものの力量によってその応え方も異なるものであることは、古典と呼ばれるものについて、あえて断るまでもない古典の持つ性格の一面である。

手際よく、というと、誤解を招きかねないが、なるべく理解しやすいように記すこととする。

概念はいかにして対象に関わるか。端的に言うところの問いをめぐっての論考がなされているのが、当該の章である。対象は現象でもある。これをさらに、思惟と感性とのかかわりと言い換えることもできよう。思惟は悟性の働きであり、純粋悟性概念は範疇である。両者は種を異にしておりかかわりあうことはない。

そこで導入されたのが「図式」である。カントは図式について次のように紹介している。

そこで範疇と同種性を持ち、他方では現象と同種性を持たねばならず、そして範疇を現象へ適用できるようにするところの、第三者がなければならないことは明らかである。この媒介作用をなす表象は純粹(一切の經驗的なものを含まない)でなければならない、しかも一面では知性的でもあり他面では感性的でなければならない。このようなのが先驗的図式なのである<sup>40</sup>。

関連して、悟性概念の図式と純粹悟性の図式性について記されている。核心に迫るものである。

われわれは、悟性概念がその使用されるに当たってそれに基づくように制限されるころの、感性のこの形式的にしてかつ純粹な条件を、この悟性概念の図式と名づけ、悟性がこれらの図式にしたがって作用することを、純粹悟性の図式性と名づけたと思う(A140、B179)<sup>41</sup>。

カントによって命名された「純粹悟性の図式性」は、「つねに単に構想力の所産に過ぎない<sup>42</sup>」とも記されている。ここで悟性と感性との両者にかかわりをもつのが構想力であること、構想力の性格と位置の重要性への着目、この一事の中に、ハイデガーのカント哲学の評価は決定していると思えることが、それほど的確を逸した見方であるとは思えない。もっともこの辺のところは微妙であり、カント解釈の持つ、永遠の課題とも言うべきものであろう。

なお、純粹悟性の図式性については、構想力の所産であるところから、また、範疇との結びつきにおいては時間の規定に関係している。そこで、「悟性の図式性とは、構想力の先驗的総合によって、内的感官における直感の一切の多様を統一する作用に帰着するものにほかならないこと、かくて、間接には、内部感官(感受性)に対応する機能としての統覚の統一作用に帰着するものにほかならない」と、図式性についてその性格を明らかにしていく。ここにおいて、構想力の先驗的総合(引用文では総合)につ

いて一言しておく。「直感の一切の多様を統一する作用」、断るまでもなく、「多様を統一する作用」は悟性を指す<sup>43</sup>。つまり構想力の総合とは、異質な感性と悟性の媒介あるいはそれらの二面を有すること、つまり、それらの総合を意味している。

さらに、カントはこの図式について、範疇とのかかわりについて念入りに指摘している。範疇は現象にのみかかわるといふ指摘など、まさに純粹理性批判の心髄に迫るものである。ハイデガーの指摘(「この十一ページ」)が想起される。

したがって、純粹悟性概念の図式は、これら純粹悟性概念を客観に關係せしめ、同時に意味を与えるところの、真にして唯一の条件である。それゆえ範疇は結局、可能な經驗的使用以外には使用されることはできない(A146、B185)<sup>44</sup>。

この章(「純粹悟性の図式性」)の結びはもはや、くどすぎる感じを与えるが、次のように結ばれている。

範疇は、図式を欠いては、概念のために要求される悟性の単なる機能にすぎず、しかも何らの対象をも表象しないのである。客観の概念を与えるような意味を範疇にもたらしものは感性であり、この感性が、悟性を制限しつつ同時にこれを実在化するものである(A147、B187)<sup>45</sup>。

浩瀚な『純粹理性批判』の真髄をなす十一ページと、ハイデガーが指摘した、その十一ページの要約七項目の七番目、「図式性によって基礎づけられたカテゴリーの本質規定の批判的適用」、が何を意味するか、掲出の引用文によって容易に解することができるであろう(断る必要はまったくないが、範疇はカテゴリーの和訳であり、訳者によって語の使用が異なる)。言ってみれば『純粹理性批判』の狙いとすることはここに尽きている。したがって次のように述べることは一つの贅語に過ぎない。

伝承的存在論は「事物一般にかんしてアプリアーの総合的認識を与えると僭称するものである」。それは無限者にのみ到来し得るようなアプ

リオリーの存在論的認識にまで自らを不当に高めている<sup>46</sup>。

もともと、この一文は哲学史の上から見た存在論について述べたもので、まさに批判さるべき純粹理性の姿であり批判の意味を伝える前提をなしている。

カント哲学に対するハイデガーの端的な評価の一つをこれに次いで見ることができる。その前に、存在論についてハイデガーが記しているハイデガーの見解を挙げておく。

この存在論がその「僭越」とともに「尊大」を脱却するならば、すなわち自らをその有限性において乃至自らを有限性の必然的本質構造として理解するならば「オントロジー」という語ははじめて正真の本質を与えられ、同時にこの語の使用が是認せられるであろう<sup>47</sup>。

存在論が有限性を本質として構造上理解される、まさにハイデガーの説、ハイデガーの存在論でもある。そこで、カント哲学へと言及する。

じじつカントも自ら「オントロジー」という言葉を、形而上学の定礎によって始めて獲得され保障されたこの意味に用いているのである。しかもそれは全体としての形而上学の輪郭を提示する純粹理性批判のかの決定的な箇所(A845, B873)においてである<sup>48</sup>。

当該の箇所に当たった限りにおいて、特にオントロジーについてのカントの説明を見出すことはできない。「先験的原理論」の成果の上に立ってのハイデガーの見解と思われる。ハイデガー自身の存在論を踏まえての見解であることは断るまでもない<sup>49</sup>。

ハイデガーが形而上学の定礎として解している、『純粹理性批判』の持つ問題点、その一つ一つといってもよいほど克明に、それらの問題点について、ハイデガーはこの大冊にして難解という評判の高い哲学書にまさに体当たりしている印象を、『カントと形而上学の問題』を読むほどに深くするのであるが、そのうちでもハイデガーが格段の思いをこめて論究

している箇所、先験的構想力に対する、第一版と第二版との差異に触れてみることにしたい。

『カントと形而上学の問題』の第二章において、構想力は悟性と感性という人間のまったく異質な二つの能力を媒介する第三者としての役割を果たす特別な性格と位置を占めていることが明らかに示された。ハイデガーは第三章において、これら三者のかわりをさらに論究して、構想力にそれまでとは異なったというより、より根源的な観点から、これを捉えようとする。すなわち、第三章中の標題にこの間の事情が明示されている。「両つの根としての先験的構想力」。第三章自体が先験的構想力を主題とするものであるのは、これまたその標題の示すところでもあり、「その根源性における形而上学の定礎」として論考されている。課題の設定の仕方といい、考察の姿勢といい、いかにも哲学あるいは形而上学の研究にふさわしい印象を与えるのは、ハイデガー特有のものである<sup>50</sup>。

感性と悟性という異質な人間能力を媒介するにとどまらず、むしろそれらをそこから生じさせる根としての機能、役割あるいは存在として、先験的構想力を、見ていこうとするハイデガーの心底にあるものは、何であろうか。

まさに根源へと遡及してやまない探究心のなせる業ではなかろうか。特にカントの指摘する人間の心(Seele)の奥に秘められた術といわれているものが関心を喚起してくるものと思う<sup>51</sup>。

当面問題としている『純粹理性批判』第一版(A)と第二版(B)との差異として、特にカント自身が言及していない内容について敢えてハイデガーが問題にしようとするところに、ハイデガー独自のカント哲学の読解を歴然と見て取ることができる。これを一言にして言うならば、感性と知性の、両哲学者における比重の置き方の違いとあってよいであろう。

ハイデガーは、該著第二版に、先験的構想力が純粹悟性概念に吸収されたとして、これを、カントの論考上の姿勢として捉え、それを純粹理性批判という一大事業における退却として非難する。『カントと形而上学の問題』の第31節の標題「置かれた基礎の根源性と、先験的構想力からのカントの退却」<sup>52</sup>が端的にそれを示す。

カント自身が、第二版の刊行(1787)に際して記していることは、初版(1781)によって生じた誤解、その責任が、カントの難解と晦渋に原因としてであると、カント自ら認め<sup>53</sup>、その点についてはできるだけ訂正するように機会を逃さないようにしたが、その他の点については「何ら変更すべきものは見出さなかった」<sup>54</sup>、その理由の一面を、「永年の吟味のゆえ」<sup>55</sup>にあるとしている。ただし、削除あるいは省略したのは理解しやすくしたのでその損失は補われているとしている。第一版によって償われるとも記している。この記述も軽視すべきではあるまい<sup>56</sup>。しかしなお、第二版序文の注に、認識の成立について、外官に属する客観について、「外官から生ずべき客観で構想力から生ずべきでない客観」と取上げて断っている点は看過できないものがあるように思われる<sup>57</sup>。

## 6.おわりに

ハイデガーとカント哲学とのかかわりを改めて顧みた。到底その全体に及ぶことはできず、また確認すべき事項のいかに多いか、再読の事態は、両思想の持つ深みを深刻に思い知らされるにいたる。もとより当事者の現在の能力によって、巨大なる作品を計らざるを得ないが、結果は平凡に終わることも、また、古典を前にしたものの通弊かもしれない。

カントの主張を、ハイデガーは形而上学の定礎と解するが、これを一言にして記すならば「有限性」である。人間の能力の有限性である<sup>58</sup>。感性が第一の意義を持つてくる。しかし顧みてなお十分に論考し得たとは到底いえない。作業継続の上、『純粋理性批判』と『存在と時間』とのかかわりについて論考を進めることとしたい。

<sup>1</sup> 新カント学派：マールブルク学派とバーデン学派の二大学派として知られている。前者に属するのは、コーヘン(Hermann Cohen,1842-1918)を創始者とし、そのもとにナトルプ(Paul Natorp,1854-1924)、カッシーラー(Ernst Cassirer,1874-19)など。後者はドイツ西南学派とも呼ばれているが、ロツツェ(Hermann Lotze, 1817- 1881)、クノー・フィッシャー(Kuno Fischer,1824-1907)の影響を受けてカント解釈に新しい局面を開いたウィンドルバンド(Wilhelm Windelband,1848-1915)。そのもとにリッケルト(Heinrich Rickert,1863-1936)、ラスク(Emil Lask,1875-1915)などの著名な哲学者がいる。ヘリゲル

(Eugen Herrigel,1884—)、グロックナー(Hermann Glockner,1896—)なども日本人には親しい。マールブルクあるいはバーデンは、大学あるいは地名に因んでの名称である。なお新カント学派は、カントの形式的認識論を継承発展したが、カントに批判的なヘーゲルは形式論理学に対して弁証法を主張、「ヘーゲルへ帰れ」と言う二十世紀初頭の運動は、ヘーゲル百年忌(1931)に最高潮に達するが、「認識論から存在論」への転換としての特色を持つ。新カント派の凋落は速く、ハイデガーの教授資格論文(1915)「結びの章」の史的意義にも関わる。

<sup>2</sup> Martin Heidegger (1889-1976)。1909年、フライブルクのベルトルド・ギムナジウム卒業。

<sup>3</sup> 主査：シュナイダー。1912年公刊。

<sup>4</sup> 学位(卒業)論文(*Die Lehre vom Urteil im Psychologismus*,1914)は、五節からなり、第一節ではヴント

(Wilhelm Wundt,1832-1920)、第二節でマイアー、第三節でブレンター(Franz Brentano,1838-1917)とマルティ、第四節ではリップス(Theodor Lipps, 1851- 1914)を挙げて当代における諸大家の説を紹介し、第五節において、それらの判断論はすべて心理主義であり、判断の問題性は心理的なものうちには存しないとして、判断に関する純粋に論理的な論考への展望をもって閉じている。なお、リッケルトの演習で使用されたテキストは、ラスクの、『哲学の論理学と範疇論——論理的形式の支配領域に関する一研究』(1911)と『判断に関する理説』(1912)、フッサールの論理学的諸研究の影響が見られるという(茅野良男『ハイデガー哲学の初期形成』、東京大学出版会、1972、180ページ参照)。

<sup>5</sup> 同上、185ページ参照。寄稿先は、『カトリック・ドイツのための文芸評論』第39巻。

<sup>6</sup> リッケルト後任としてのフッサール着任は1916年。

<sup>7</sup> 茅野同上、209ページ。

<sup>8</sup> 教授資格論文については、「結びの章」の評価は異口同音に高いが、本文について関連して言及しているものは少ない。茅野同上205ページの指摘は示唆に富み参考となるので以下引用しておく。(ハイデガーがフッサールの『論理学的諸研究』を重視し、そこで説かれた精神の重要性を今日も強調するのは、実は右のようなハイデガーの素朴な事柄への注視と連関しているのではあるまいか。ともかくこの態度はリッカーのような認識論的主観主義ではない。そしてフッサールが『考案』以降で展開する主観態の分析の方法には、なじまないものであるであろう)。

ハイデガーとリッケルト、あるいはフッサールとの差異を端的に示してもいる。

<sup>9</sup> *Die Kategorien- und Bedeutungslehre des Duns Scotus*, (1916)。1915年春に完成、同年夏学期にフライブルク大学哲学部に提出。

<sup>10</sup> 渡辺二郎『ハイデッガーの実存思想』、勁草書房、1962、166 ページ参照。

<sup>11</sup> 同上、164-5 ページ参照。

<sup>12</sup> カント『純粋理性批判』高峯一愚訳、河出書房新社、1965、103-4 ページ参照。

<sup>13</sup> カント哲学の読解、ここに単にカント哲学というが、一般にカント哲学と称して、特にその解釈の対象にされているのは、断るまでもなく『純粋理性批判』である。いかにこの書の、いわゆるカント哲学に占める位置の大きさ、高さを思い知らされる。この巨匠の手になる大作はその故にまた、これに接するものの接し方によって解釈を異にしてきた。ここに、解釈すなわち読解の問題が生じてくる。このこと自体一つの学の領域を形成するといつて過言ではない。わが国においては、著名なカント解釈の例として、高坂正顕、岩崎武雄などの説が挙げられ、当然それらをめぐっての異論が展開されている（一例に、黒積俊夫『カント批判哲学の研究』、名古屋大学出版会、1992）。近年において指摘されているのは、科学論的認識論と形而上学の二様の解釈（後出、注 25、門脇訳 309 ページ参照）。

<sup>14</sup> カント積年の労作と呼ぶにふさわしい年月を費やし高齢に達して刊行された。カント自らの告白がそれを示して余りある。「私も六十歳になる、この先の生き方に自信が持てない」「このときに発表しなければその機会を永久に失うであろう」。いわば高齢に達したカントのあせりに似た気持ちだが、必ずしもこの世紀の大著を執筆編集において適切であったか、疑いを持って見られる原因ともなっている。つまりこつこつと十二年に及ぶ歳月を一定の指針のもとに確かな足取りで進めてきたのではなく、余命いくばくもなしと、当時にしては十分な高齢に達し、また生来蒲柳の質と伝えられる身体上の理由から、一種の切迫した危機感のもとに、多年の断片的な労作をわずか数年のうちに徹底した推敲の暇もなく纏め上げたとする資料にもとづく見方である。しても無理からぬものがあつたと言わねばなるまい（岩崎武雄『カント「純粋理性批判」の研究』2—3 ページ参照）。

<sup>15</sup> 前出、高峯訳『純粋理性批判』13-4 ページ、引用の原文(ラテン語)では、( *quum revera sit infiniti erroris finis et terminus legitimus.* ) と結ばれている。

<sup>16</sup> 同上、55 ページ参照。

<sup>17</sup> カント『プロレゴメナ・人倫の基礎づけ』土岐邦夫、観山雪陽、野田又夫訳、中公クラシックス、2005、183 ページ参照。

<sup>18</sup> 前出、高峯訳『純粋理性批判』、104—5 ページ(A84, B116)参照。

<sup>19</sup> 同上、59 ページ。

<sup>20</sup> 同上、(A14, B28)。

<sup>21</sup> 同上、60 ページ (A17, B29)。

<sup>22</sup> 同上。なお *Bewegungsgründe* (A17), *Triebfedern* (B29)。

<sup>23</sup> ハイデッガー「カントと形而上学」暉峻凌三訳、『世界大思想全集:哲学・文学20 ヤスパース・ハイデッガー』、河出書房、1972、183 ページ。定礎にはグルンドレーグンクというルビがふられている。

<sup>24</sup> 暉峻訳同上、185 ページ。

<sup>25</sup> 「思考する人々は、欠陥あるものからより長続きするように学ぶものである」(第二版の前書き、1950)、また第三版(1965)には「形而上学の問題」という言廻しは二重の意味を持っている」と記している(『カントと形而上学の問題・ハイデッガー全集第3巻』門脇卓爾訳、創文社、2003、9-10 ページ参照)。

<sup>26</sup> 前出、暉峻訳「カントと形而上学」183 ページ。

<sup>27</sup> 同上、186 ページ参照、なお、*physika* は「自然」を意味する *physis* に由来し、*meta* は「一の後ろに」、を意味するところから「一を超えて」と解され、アリストテレス著作の編集が単純に「自然に関する学」の後ろに配置したところから、この名称 *meta ta physika* → *metaphysika* が生まれ、「自然を超える学」すなわち「形而上学」の成立、展開を見るに至る。ハイデッガーは、この間の事情を適切に、また独自の見解を持って説いている。「当惑をあらわす学」など、アリストテレス著作の編集者の心中を慮ったユニークな「形而上学」の紹介ではあるまいか。

<sup>28</sup> 同上。なお、注目すべきことは、カントは一切、哲学史上の形而上学の成立事情に触れていないことである。「人間本性としての形而上学」、このカント独自の形而上学観、形而上学についてのカントの見方のそもその由来が、形而上学の語源の *meta*-にあること、このことは極めて重要であるように思う。人間とはまさに「超えていく存在」、これが人間の本質をなしている。そうであるからこそ、カント哲学の性格が端的に『純粋理性批判』に現れている「先験的」、あるいは「超越的」という語の使用がそれを証しているといえよう。なお「先験的」よりは「超越論的」のほうが訳語として適切であるという指摘もなされている、(ハイデッガー『カントと形而上学』佐藤慶二譯、三笠書房、1938、17 ページ参照)。

<sup>29</sup> 同上、暉峻訳『カントと形而上学』、187—8 ページ。

<sup>30</sup> 同上、195 ページ。

<sup>31</sup> 同上、194 ページ参照。

<sup>32</sup> 同上、195 ページ。A は『純粋理性批判』第一版(1781)、B は同第二版(1787)。引用文中「直感」にはカントによる傍点が付されている。ハイデッガーの特に注目するところである。

<sup>33</sup> 同上。(Für alles Verständnis der Kritik der reinen Vernunft muß man sich gleichsam einhämen: Erkennen ist primär Anschauen.)

<sup>34</sup> 『純粋理性批判』においては、第二版の巻頭に掲げ

ているベーラムのベーコンの『大改革』の「迷妄を絶つ」という言葉、あるいは、『判断力批判』の59節の有名な一句、*Die Realität unserer Begriffe darzutun, werden immer Anschauungen erfordert.* (われわれの概念の实在性を確証するためには、常に直感が要求せられる)。また、認識と対象について、概念が経験的概念の場合には、直感は実例 (Beispiele) と呼ばれ、純粹悟性概念の場合には、直感は図式 (Schema) と呼ばれる。しかし、理性概念の場合には、これに対応する直感はない。(この項については、河出書房新社刊『世界の大思想 11』「カント〈下〉」所収「判断力批判」坂田徳男訳 291 ページ、『ドイツ観念論と十八世紀言語哲学』、316-7 ページ参照)。

<sup>35</sup> 前出、暉峻訳『カントと形而上学』、237 ページ参照。

<sup>36</sup> 同上、252-3 ページ参照。

<sup>37</sup> ハイデガー自身、「遂行」の第四段階の一応の説明の後に、この七項目の要約を記しているのであるが、そこには説明し尽くしたという満足感がなかったのではなかったかと推測される。このこととハイデガーによるカント哲学の少なくともこの図式論における評価とは異なる、この点は誤解のないよう強調しておきたい。あえて、カントの言葉を引用して、その難解さに触れている、また触れざるをえないハイデガーの心中を推察した上でのことでもある(同上、253 ページ参照)。

<sup>38</sup> 同上、253。

<sup>39</sup> 煩雑さを避けて、細節を記さなかったが、『カントと形而上学の問題』45 節中、第四段階には、18「先験的演繹の外的形式」の後半部と 19「超越と感性化」、20「形象と図式」、21「図式と図式-形象」、22「先験的図式性」の一連の各節を含んでいる。このように『純粹理性批判』と対比してみると、鮮やかにハイデガーの当該箇所についての論考姿勢を見て取ることができる。拙稿において示したように、先見的図式性(第22節に相当)は、当該箇所のほんの入り口に過ぎない。つまりハイデガーの関心はカントの思惑を超えて、図式問題に拘ったため、自ら『純粹理性批判』という浩瀚な著作全体の真髓をなすに違いない「この十一ページ」(暉峻訳『カントと形而上学』237 ページ)と記しながら、その全面に及ぶことができず、七項目に要約しなければならなかったと見ることができそうである。もとよりそこにはハイデガーの粘り強い思索のあとを如実に示しているのであるが、(五つの点についての考察およびその展開など好例である、:同上、245 ページ参照)。

<sup>40</sup> 前出、高峯訳『純粹理性批判』、150 ページ。

<sup>41</sup> 同上、151 ページ。

<sup>42</sup> 同上。

<sup>43</sup> 悟性の上位にある理性もまた統一作用を持つ(悟性の構成と理性の統一、理性に広狭二義あり)。狭義の理性には対応する直感はない。カント哲学の要である。

<sup>44</sup> 同上、153 ページ。

<sup>45</sup> 同上、154 ページ。「実在化する」について、訳者高峯一愚は「図式を通して概念へと導く」と注している。しかし、多少分かりにくい感がしないわけでもない、むしろ、実在化は概念を主として見ているのであるから、つまり概念の実在化であるから、概念が図式を介して感性(直観)とかかわる、つまり原文どおり概念(「これ」)を実在化するのが、適切と思う。微妙な観点の相違であるが訳者注解は親切に過ぎたと言うべきか。

<sup>46</sup> 前出、暉峻訳「カントと形而上学」、260 ページ。

<sup>47</sup> 同上。

<sup>48</sup> 同上。

<sup>49</sup> ちなみに、カントが挙げている形而上学の全体系は四つの主要部門から成る。1、存在論。2、合理的自然学。3、合理的宇宙論。4、合理的神学。(同上、高峯訳『純粹理性批判』(A846, B874) ,528 ページ参照)。

<sup>50</sup> ハイデガーの著作のいたるところに現れているが中でも *Was ist Metaphysik ?* (『形而上学とは何か』) あるいは *Was ist Das, die Philosophie ?* などは標題からして、さらにその論述の仕方において、まさにカントの言う、哲学とは哲学することの実践である。

<sup>51</sup> 前出、高峯訳『純粹理性批判』151 ページ(A141, B180) 参照。

<sup>52</sup> 前出、暉峻『形而上学』283 ページ。

<sup>53</sup> 前出、高峯訳『純粹理性批判』39 ページ参照。

<sup>54</sup> 同上。

<sup>55</sup> 同上。

<sup>56</sup> ハイデガーの非難(退却という語にこめられている)を予感しているかに見えるカントの記述であるが、なおカント自注の示しているように、構想力についての両者の比重の置き方の違いには、人としての性格の相違もかかわってくると見ることもできようか。

<sup>57</sup> 同上、42 ページ(B, XI L)参照。「本当の意味での増補」として第二版序の文末に添えられている一文は、拙論に記していない、「物自体」、「一と、私は考える」(*ich denke...*) = 純粹統覚、時間論など『純粹理性批判』のカント自身による最終要約として貴重である。

<sup>58</sup> 人間存在(現存在)の有限性である。ただし両者には顕著な違いがある。この点を鋭く突いたカッシーラーの見方が光る(前出、暉峻訳「カントと形而上学」361 ページ参照)。

(Received: September 30, 2010)

(Issued in internet Edition: November 1, 2010)